



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	1919年のオーストリア社会民主党とハンガリー・ソヴェト共和国の関係
Author(s)	矢田, 俊隆; YADA, Toshitaka
Citation	北大法学論集, 27(3-4), 1-46
Issue Date	1977-03-30
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/16212">https://hdl.handle.net/2115/16212</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	27(3-4)_p1-46.pdf



# 一九一九年のオーストリア社会民主党と

## ハンガリー・ソヴェト共和国の関係

矢 田 俊 隆

### 目 次

はしがき

- 一 ハンガリー・ソヴェト共和国の成立と国際環境
- 二 ハンガリー共産政權の働きかけとオーストリアの対応——第一期
- 三 ハンガリー共産政權の働きかけとオーストリアの対応——第二期
- 四 ハンガリー共産政權の働きかけとオーストリアの対応——第三期
- 五 ハンガリー・ソヴェト共和国の終末とオーストリア

むすび

はしがき

第一次世界大戦末期のオーストリア・ハンガリー帝国の解体は、東・中欧に大きな影響を及ぼしたが、とりわけ、

旧帝国内の被支配諸民族が分離・独立したあとのドイツ系オーストリア人の立場は、はなはだ微妙であった。

一九一八年十一月の帝国崩壊のあと、彼らには、四つの可能性があった。第一は、彼らだけで単独に一つの独立国を樹立することであったが、これは、彼らが最も望むことの少なかった方策であった。第二は、ドイツ国との合併 *Anschluss* であり、これは、大多数の人々に望まれていた。第三は、ハンガリーのベーラ・クン *Béla Kun* 共産政権との連繫であり、たしかに一時オーストリアは、共産主義者の活動範囲に引き入れられるかもしれぬ可能性もっていた。第四は、オーストリアを新興諸民族国家と結びつけて、旧ハプスブルク帝国の領域内に一つの政治的ないし経済的連合体（ドナウ連合）を樹立する構想であり、これは協商国側に支持されていた。

以上のうち第四の道は、新興継承諸国の内部に反対があつたばかりでなく、ドイツ系オーストリア人の大部分もこれを希望しなかつたために、理論的可能性以上のものに發展することはなかつた。これに反して、ドイツ国との合併ないしソヴェト・ハンガリーとの同盟は、現実<sup>(1)</sup>にありうることであつた。そのうち前者 *Anschluss* については、別稿で詳しく検討したので、本稿では、後者について立ち入つた考察を行なうことにする。一九一九年三月ハンガリーに成立したベーラ・クン共産政権は、ドイツ系オーストリア国にどのように働きかけ、またオーストリア共産党はどのような活動を行なつたか、これに対してオーストリアの政府および社会民主党はどのように反応したかを、協商諸国やソ連の態度と関連させつつ可能なかぎり詳細に跡づけ、こうした一連の経過のうちにみられる重要な特徴を明らかにするのが、この論文の主要な目的である。<sup>(2)</sup>

(一) 拙稿「オーストリア・ハンガリー帝国の解体と *Anschluss* 問題——一九一八—一九一九年のドイツ系オーストリア国の立場を中心にして」『西洋史学』一〇四（一九七七）。

(二) 本稿は次の諸研究に負うところが多し。H. Steiner, Otto Bauer und die "Anschlussfrage" 1918/19; A. D. Low, Austria

between East and West : Budapest and Berlin, 1918—1919 : Low, The First Austrian Republic and Soviet Hungary : F. L. Carsten, Revolution in Central Europe, 1918—1919, Berkeley 1972 : R. L. Tökés, Bela Kun and the Hungarian Soviet Republic, : New York 1967 : N. Leser, Zwischen Reformismus und Bolschewismus, Wien 1968 : V. Reimann, Zu Gross für Österreich, Wien 1968 : O. Leichter, Otto Bauer, Wien, 1970

### 一 ハンガリー・ソヴェト共和国の成立と国際環境

第一次大戦におけるオーストリア・ハンガリー帝国の軍事的敗北は、従属諸民族の独立運動を促進してこの国の解体を決定的なものにすると同時に、ハンガリー内でも、貴族を中心とする旧支配勢力の政策を完全に破産させた。一九一八年十月二十五日、進歩的貴族ミハイ・カーロイ Mihály Károlyi がブルジョア反対派および社会民主党とともにハンガリー国民会議を結成して、その議長となったが、月末にはブダペストに民衆の蜂起がおこり、こうした状況のなかでカーロイが首相に任命され、十一月一日オーストリアとの連帯を絶った。十三日、ハプスブルク家最後の王カール Karl がハンガリーに対する支配権を放棄したあと、十六日、旧ハンガリー議会はその機能を国民会議に委譲して解散し、国民会議はハンガリー民主共和国の成立を宣言するとともに、カーロイを臨時大統領兼首相に選んだ。カーロイ政権の課題は、新独立国ハンガリーの国際的地位を安定させる一方、国内では思いきった社会改革を実行して、ブルジョア民主主義の現実的基盤をつくり出すことであつたが、しかしこの政権は、協商国の支持を得ることもできなければ、国内の改革にも成功しなかつた。

当時ハンガリーでは、戦争による一般的悪化のほかに、従属諸民族の離脱、数百万のマジヤール人の意に反した切斷などが、協商国によるきびしい取扱いと結びついて、人々を絶望的な気持にしていた。こうした事情のもとで、国内政治の重心は急速に左へ傾いていった。ロシア十月革命の実例と、ロシアで訓練をうけた共産主義者たちの宣伝活

動とは、動揺したハンガリー人のうえに大きな影響を及ぼした。すでに一九一八年三月二十四日、ロシアでは、ハンガリー人捕虜たちによってハンガリー共産主義者グループが組織されていたが、その大部分はカーロイ政権下に帰国し、国内の左翼諸派を結集して、十一月二十日ハンガリー共産党を設立し、武装蜂起による政権の奪取、プロレタリア独裁の樹立をスローガンにして、宣伝と扇動を行なっていたのである。これは社会民主党指導部の方針と対立するものであったから、後者は労働組合とブタベスト労働者協議会(ソヴェト)から共産党員を排除することを指令し、一九一九年二月二十日共産党デモ隊と警官隊との衝突事件がおこった直後、カーロイは社会民主党の要請にもとづいて、ベーラ・クンをはじめ共産党幹部の大部分を逮捕した。

しかしこれはかえって労働運動を急進化させ、むしろカーロイ政府の孤立を深める結果になり、さらに連合国の強圧がこれに追討ちをかけた。三月二十日、連合国軍代表ウィクス(Vix)中佐はルーマニア軍によるトランシルヴァニア全土の占領をカーロイ内閣に通告したが、これはハンガリーにとって、全トランシルヴァニアの喪失を意味するものであった。カーロイは自由主義的・共和主義的な政治家であり、親連合国の感情の持主として知られていたが、この最後通牒に接してもはや協商国側から何も期待できないという結論に達し、辭職を決意した。彼は労働組合に支持された社会民主党単独内閣の結成を提案したが、翌二十一日の社会民主党執行委員会は、協商国・旧支配勢力の反革命・共産主義運動の三方面から攻撃される破目に陥ることを恐れて、カーロイに無断で共産党との統一を決定し、獄中のベーラ・クンら共産党指導者たちと交渉して、彼らの意向に添った合同協定を作成し、ここにプロレタリアート独裁をかかげるハンガリー・ソヴェト共和国が成立した。新革命政府は社会民主党のガルバイ(Garbai)が議長であったが、外務人民委員になったベーラ・クンが中心的地位を占めた。こうしてハンガリーでは、ブルジョア派中道政権の破産と社会民主党の共産党への接近によって、一挙にソヴェト共和国が出現したが、このような権力の平和的移

行を促進した主要な原因が、協商国側の高圧的態度とソヴェト・ロシアへの期待であったことは、注目に値する。

ところで、ハンガリーの新ソヴェト共和国は、当初から近隣の新興諸国に脅かされなくてはならなかった。彼らは民族革命の敵であるようにみえたポリシエヴィズムを嫌い、またこれに恐怖を感じ、ソヴェト・ハンガリーに対する軍事行動の準備をはじめ、四月からルーマニア軍とチェコ軍の攻撃が始まった。一方、連合諸国はいうまでもなく新ソヴェト共和国の打倒を望み、旧ハンガリーの領土を新興諸国の前に好餌としてちらつかせつつ、ソヴェト・ハンガリー包囲網の完成を最大の目標にした。こうした事情のもとで、ドイツ系オーストリア国の帰趨はまことに重大であった。

ソヴェト・ハンガリーは、明らかに、オーストリアにもソヴェト政権が成立することを願っていた。これによって自己の立場を強化し、敵意に充ちた包囲陣を破ることが期待できたからである。ソ連は、もとより共産主義の急速な膨脹を望んでいたから、ハンガリー革命がオーストリアの共産主義運動を強化し、「オーストリアおよびドイツへソヴェト基地を拡げること」<sup>(2)</sup>に期待をかけていた。四月はじめにミュンヘンでソヴェト共和国が宣言されたことは、このようなポリシエヴィズム発展のきざしとしてモスクワのコミンテルンを元気づけ、四月一日のイズヴェステシアは、ウィーンはすでに「赤くなりはじめ」おり、「まもなく完全に赤くなるであろう」と述べている。<sup>(3)</sup>

他方連合国側にとっても、ドイツ系オーストリア国特にその社会民主党がハンガリーの新事態にどう対処するかは、重大な関心事であった。ハンガリーにおけるソヴェト共和国の成立が西側の非妥協的な政策の結果でもあっただけに、オーストリアが社会革命の方向に動くかもしれないという協商諸国の不安は大きく、ハンガリー共産政権の指導者たちが西方に貪欲な目を投げかけたとき、彼らの懸念はさらに増大した。四月はじめ、ポリシエヴィズムがハンガリーからオーストリアを経て南ドイツに発展するきざしをみせたことは、パリ講和会議にも暗影を投げかけた。講和

会議がスマッツ將軍 Jan Christian Smuts をブタベスト・ブラハ・ウィーンに特派したことは、こうした懸念の公然たる表明であつた。<sup>(4)</sup>もしソ連が、以前中欧を支配したドイツ人およびマジャール人との連携に成功するならば、ポーランドやチェコスロヴァキアのような連合国の息のかかった近隣の新興諸国は押しつぶされる危険があつたから、西側列強はこうした事態を極力防止しようとしたのである。そこで彼らは、オーストリアがハンガリーに対して、武器や義勇軍の提供、外交的承認を含むいっさいの援助を拒否することを希望した。<sup>(5)</sup>彼らの最大の目標は、西部ハンガリーをオーストリアに譲渡することによってソヴェト・ハンガリーとオーストリアの間を不和にし、必要な場合には、オーストリアを対ハンガリー作戦の基地として使用し、ソヴェト共和国の倒壊を促進することであつた。

次にオーストリアの事情をみよう。一九一八年十一月に成立したドイツ系オーストリア共和国の新内閣は、社会民主党とキリスト教社会党の連合体であつたが、前者が主力をなし、首相には同党のカール・レンナー Karl Renner、外相には同じくヴィクトル・アードラー Viktor Adler が就任してゐた。<sup>(6)</sup>当時、有産者グループやブルジョア諸政党は、軍隊と警察という伝統的支柱を失い、革命の恐怖におびえて、<sup>(6)</sup>守勢に立っていたが、同時にまた新オーストリアは、重大な経済的困難に直面してゐた。工業製品の市場が失われ、原料・食糧の供給地がもぎとられたうえに、新興継承諸国がオーストリアに強い敵意を抱いて、高い関税障壁を設けていたから、オーストリアの経済は逼迫し、休戦後もしばらく連合国側の封鎖が続いたことによつて、一段と悪化した。このような窮状は、軍隊の解体と失業の増大によつてさらに強められ、大衆は広範囲にわたつて、深い絶望感にとらえられてゐた。

こうした状況のもとで、社会民主党に支配されたオーストリア内閣は、共産党および急進化した労働者階級のつよい圧力を受けなければならなかつた。一九一八年十一月三日正式に成立したオーストリア共産党は、弱小ではあつたが、ソヴェト共和国の樹立を声高く叫んで宣伝に努めており、プロレタリアートの間でも、新たに登場した共産主義

への同情、漠然とした親ロシア的感情が支配しており、なお社会民主党の指導下にあつた大衆も、共産主義者の努力を好意的に眺めていた。

ハンガリーにソヴェト政権が成立した直後のオーストリアの国内事情について、鋭い外交的観察者、アメリカのクーリッジ教授 Archibald Coolidge は、四月七日、パリの講和交渉委員会にあてて、「ウィーンの警察長官ヨハン・シヨバー Johann Schober は憂鬱な精神状態にある」こと、「ほとんどすべてのものが不足し、物価は暴騰の一路を辿っている」こと、「失業者は多数にのぼり、経済と財政の状態は悲惨である」ことを報告し、当地の状況についての自分の印象は「気のめいるようなもの」である、と書いている。同時に彼は、こうした事情のもとでポリシェヴィズムが成長を遂げつつあること、ハンガリーの例は疑いもなくウィーンの人々に刺激を考えていること、オーストリアとハンガリーの関係はなお緊密であり、ハンガリーからすでに数人の著名な扇動家が活動をはじめするためにウィーンにやってきたとの噂があること、などを伝えている。<sup>(7)</sup>

一九一八年の春オーストリアに駐在した西側の外交的代表者たちは、この国の危険な経済状況について意見が一致していたが、同時に彼らは、全ヨーロッパの見地からオーストリアにおけるポリシェヴィズムの波をくい止めることの重要性を理解していたから、彼らの利害と感情をオーストリア政府に知らせ、これに圧力をかけることに躊躇しなかった。

ハンガリーにソヴェト政権が成立した数日後、ウィーン駐在のイギリス代表でたまたまブダペストに来ていたカニングラム大佐 Colonel Thomas Cunningham は、ブダペスト駐在のオーストリア公使クノップロッホ Von Cunochoch に、「ハンガリーを完全に見捨てて、イギリスおよびアメリカの方に顔を向けるよう忠告し」、この見解を本国の外相オットー・バウアー Otto Bauer (彼はヴィクトル・アードラー急死のあとをうけて、一八年十一月外相になっていた)

および首相レンナーに伝えるよう希望したが、その際は彼は、オーストリアはハンガリーからは食糧を得る希望さえないが、協商国はエルベ川經由でドイツ系オーストリアに食糧の供給をはかるであろうと付け加えた。<sup>(8)</sup>西側列強は、ウィーンに対して時には救いの手をのべ時には警告と脅迫を加えるという、鯨と笞の政策を進めたのである。

(1) ハンガリー・ソヴェト共和国の成立過程については、斎藤稔「ハンガリー・ソヴェト共和国(一九一九)——その成立と崩壊」『歴史学研究』二四四号(一九六〇)参照。

(2) *Izvestia*, March 25.

(3) *Ibid.*, April 1.

(4) Alfred D. Low, "Austria between East and West: Budapest and Berlin, 1918-1919", *Austrian History Yearbook*, Vol. IV-V, 1968-1969, p. 49.

(5) それゆえ、ドイツ系オーストリア国がソヴェト・ハンガリーとの間に「外交関係を樹立したこと」は「協商国の公的サークルの間に、特にアメリカ人に、非常にわるい印象を」つくりあげてしまった。ユハン・ハーゲン駐在のオーストリア公使タイム・デム伯は、本国のソウアー外相に「アメリカ公使が彼にこのように伝えた」と報告している。Haus-, Hof-, und Staatsarchiv, Wien, (以下 HHSА と略記する) Fasc. 262, Präsidialakte des Staatssekretärs Dr. Otto Bauer 1918-1919, Folder ix: Ungarn, April 3: Low, "The First Austrian Republic and Soviet Hungary", *Journal of Central European Affairs*, Vol. XX, No. 2 (July, 1960), p. 176. 以下 HHSА の史料は基本的に Low の引用分とする。

(6) K. v. Schuschnigg, *My Austria*, New York 1938, p. 46 は「多くのものが「おどめられた」ことを認めている」。

(7) *Foreign Relations of the United States*, Paris Peace Conference, XII (Washington 1947), 287.

(8) HHSА, Fasc. 262, Folder ix, Cnobloch, März 27, 1919. ハンガリーにおける諸事件の進行について協商国側が不安をもちつづるようニュースは「および、共産主義がオーストリアに広がる危険のニュースは」フダバストからだけでなく、ハルムおよびコンメンハーゲン駐在のオーストリア公使からもウィーンに届いた。 *Ibid.*, Baron de Vaux, Bern März 28.

一一 ハンガリー共産政権の働きかけとオーストリアの対応——第一期

そこで次に、オーストリア政府のソヴェト・ハンガリーに対する態度を、時間の経過に添いながら、四つの時期にわけて具体的に詳しく検討することにする。オーストリア社会民主党内閣がハンガリー共産政権の働きかけに応ずる可能性は、はたして存在したであろうか。

一九一九年三月二十二日、ブダペスト駐在のオーストリア公使クノップロツホは、カーロイの辞任と共産政権の成立を本国のパウアー外相に報告するとともに、今後とるべき政策について訓令を求めた。これに対してパウアーは電話で、ハンガリーの新人民委員ベーラ・クンを尋ねて次の点を説明するよう指令した。

ドイツ系オーストリアは「ハンガリー国に対して常に最も友好的な意向を抱いてきた。これらの感情は——新政府の国内政策にかかわりなく——なんら変わらないであろう。ドイツ系オーストリアは、ハンガリーの国内事情になんらかの影響を及ぼすことは控えるつもりであるが、他方、われわれの内政に影響を及ぼすようないかなる宣伝、いかなる企ても避けらるべきことを、要求しなければならぬであろう。」<sup>(1)</sup>プロレタリア独裁の可能性については、オーストリアの事情はハンガリーのそれとはまったく異なっている。いかに強固なプロレタリア独裁の支持者でも、ハンガリーに樹立されたような政権は、オーストリアでは二、三日中に必ず崩壊するであろうことを、認めざるをえないはずである。

こうしてパウアーは、オーストリア社会民主党が喜んで優勢なソヴェト政権の側につくであろうと考えていたベラ・クンやハンガリーのポリツェヴィストたちの希望を、しばませてしまった。ここで注目されるのは、オーストリアがその特殊な地政学的立場のゆえに協商国に依存していることを、示唆している点である。<sup>(2)</sup>

しかしハンガリーのソヴェト政権は、最初共産党との協力を拒否したハンガリー社会民主党が、周囲の事情に迫られて態度を変え、以後ポリシエヴィズムと運命を共にしたように、オーストリア社会民主党も、オーストリア共産党に刺激され、またハンガリーが進んで提供する協力を助けられて、自己の見解を変えるに至るかもしれないという希望を、抱き続けた。<sup>(3)</sup>

とはいえ、ブダペストとウィーンの間に関係が樹立されたことは、なんといつても、ハンガリーのポリシエヴィズムにとって一つの勝利であった。他の近隣諸国や西側列強がハンガリーの新政権を承認しなかつた状況のなかで、オーストリア政府による承認は、ハンガリーの外交的孤立を打ち破り、西方への窓を開いたからである。その際ハンガリーは、オーストリア内の諸問題に干渉しないことを約束したけれども、実際には直ちに国境を越えて活発な扇動をはじめた。

ソヴェト・ハンガリーはまず東方に目を向け、レーニンに「国際的プロレタリアートの指導者」という挨拶を送つて、ソ連との「同盟」をもとめ、「適切な指令」<sup>(4)</sup>を要請した。同時にハンガリー社会党（社会民主党と共産党の合同体の暫定的呼称）は、「万人への」<sup>(5)</sup>「アピールのなかで、イギリス・フランス・イタリア・アメリカの労働者にも挨拶を及ぼし、「ソヴェト・ハンガリーに対する彼らの国の政権の恥ずべきキャンペーン」を大目にみないように訴え、ベーマン・ルーマニア・セルビア・クロアチアの労働者と農民にも、「特権階級のもの、地主および王朝に対する武装同盟」<sup>(5)</sup>をつくるよう懇請し、そして最後に、ドイツ系オーストリアおよびドイツの労働者に、「ハンガリーのプロレタリアートの例にならってパリときっぱり絶縁し、モスクワと連繫すること」を求めた。ソヴェト・ハンガリーが、敗戦によって革命的意識を高められた国々、中でもオーストリアのプロレタリアートに最大の期待をかけていたことは、このアピールの直後に、オーストリアの労働者だけにあてて、「ハンガリー・プロレタリアート」の名において次のような

声明を発していることから、明らかである。

「われわれは、君たち階級意識をもったプロレタリアートに、まさにわれわれの存立そのものためのこの巨大な戦いにおいて、超然としていないでほしいと願うものである。……圧制に対する戦争を宣言し、万国のプロレタリアートの真の団結を共同して打ち立てるために、われわれと提携してほしい。……ソヴェト政府よ、長命であれ！革命的なドイツ系オーストリアのプロレタリアートよ、長生きせよ！」<sup>(6)</sup>

しかしオーストリア労働者協議会の執行委員会は、このようなベーラ・クンの要望に対して、丁重なしかし冷い受け取り方をみせた。彼らは、「ドイツおよびオーストリア・ハンガリーの帝国主義が崩壊したこんにち」、協商国の帝国主義こそ「主要な敵<sup>(7)</sup>」であるというクンのテーゼには、表面同意したが、ハンガリーの例に従うようにという訴えには、日和見的な答え方をした。「われわれは大いにそうしたいのだが、不幸にも、現時点ではそれは不可能である。」協商国はおそらく直ちに封鎖をかけるであろうから、オーストリアには饑饉がおこることになる。「われわれは、ソ連がわれわれを助けるためにあらゆる手段を講ずるであろうと確信している。しかし、ソ連がわれわれを助けることができる以前に、われわれは飢死するであろう。」オーストリアの執行委員会が自国内で「ソヴェト組織を拡大することを決定した」という知らせは、ハンガリーに到着したが、しかしそれは、ハンガリーのソヴェトにはほとんどなんのはげましにもならなかった。

オーストリア社会民主党の機関紙「労働者新聞」Arbeiter-Zeitung の三月二十三日の論説「ハンガリーとわれわれ」は、この点ではなほ注目される。それは、ソヴェト・ハンガリーの実例がオーストリア労働者階級の心を強く動かしたことを、まず率直に認める。「すでに多くの目はいつそう明るく輝き、多くの心臓はいつそう速く鼓動している。われわれの状況は、ハンガリーの同胞のそれと同じではないか？ここ——ドイツ系ベーマン、ズデーテン地方、

南ティロール、ケルンテンおよび下シュタイエルマルク——では、ドイツ人の土地は、人々をあたかも家畜のように処分する傲慢な勝利者に脅かされてはいないか？」しかしそれにもかかわらず、オーストリアは完全に無力であり、食糧、石炭および原料について全面的に西側に依存していることを指摘し、オーストリアのプロレタリアートはハンガリーの同胞よりも「ずっとわるい状況」にあると述べ、さらに次のように議論を展開する。「なるほどわれわれは、ハンガリーの同胞が行なったと同じように容易にかつ速やかに、われわれ自身の国のブルジョアジーを引きずりおろすことができるであろう。すなわち、少数の大隊で足りるだろう。しかし協商国のブルジョアジーにかんしては、われわれは、ハンガリーのプロレタリアートとはまったく違った仕方であつて束縛されている。……プロレタリアートの独裁は、ここでは戦争の宣言とまったく同じであろう。ハンガリーの人々はわれわれに、パリから離れてモスクワと連繫するよう勧告している。しかしモスクワはるか遠くにあり、ソヴェト軍はわれわれから一、〇〇〇キロメートル以上も離れており、ポーランドとウクライナ人がソ連とのあらゆる接触からわれわれを遮断している。」金持もしくは農民からの微発は、たとえ役に立っても、ほんの微々たるものであろうし、ハンガリーの穀物の豊穡な地域は外国軍隊に占領されているから、ハンガリーはオーストリアを助けることはできないであろう。「協商国のブルジョアジーはわれわれを鎖で縛っており、……われわれ自身のブルジョアジーのうえに保護の手をおいている。」しかし絶望する理由はない。なんといっても「ソヴェト独裁は、われわれの主張が前進しつづつあることを証明している。社会革命の波は、容赦なく東から西へうねり進んでいる。イギリス・フランス・イタリアの労働者階級が鎖を断ち切るとき、時機が到来するであろう。……こんにちわれわれは無力であるが、しかし協商諸国のプロレタリアートが彼らのブルジョアジーに対抗して立ち上がるならば、その時には、われわれもまた彼らと同盟して、われわれの鎖を断ち切るであろう。」

この論説は、オーストリア社会民主党がハンガリーのポリシエヴィズムの主張とオーストリア社会主義の主張とを「われわれの主張」として同一視しながらも、協商国のプロレタリアートもまた「鎖を断ち切る」準備ができていなければみずから社会革命の方向に動くつもりはないことを、十分明確化したものであり、ハンガリーの共産陣営に身を投じて近い将来プロレタリア独裁をうち立てようとする意志と希望を、事実上放棄したものと云ってよい。ハンガリーの例に従わないというオーストリア社会民主党の態度は、このように、三月の段階ですでに決定されていたのである。

「労働者新聞」に示されたこの政治路線は、基本的には、八月ハンガリーのソヴェト政権が倒れるまで、以後数カ月間変わらなかった。「ハンガリーの同胞」の「勇氣」は賞賛され、ハンガリー革命の目標に対する広範囲な同意は表明されたけれども、その賞賛はいまいであり、当初から冷静な判断の欠如がそれとなく指摘され、またハンガリーの労働者階級の覚悟についても疑問が投げかけられた。そのかぎりでは、協商国列強の恐怖と不安は、誇張されたものであったことが判明したのである。

オーストリア社会民主党とハンガリー・ソヴェト政権の間の微妙な対立の背後には、過去にさかのぼる思想的差異があったことをみのがすわけにはゆかない。第一次大戦に先立つ長年の間、オーストリア社会民主党は団結権、出版の自由、選挙権など広範な政治的デモクラシーを求めて努力し、すでにそれを確保していたから、政治的デモクラシーの価値に無頓着ではありえなかつたし、その意義を過小評価する気にもならなかつた。彼らはプロレタリアート独裁を完全に退けはしなかつたけれども、この概念は、多数者による民主的支配、すなわち、住民中の単なる少数者にすぎないブルジョアジーに対立するものとしての工業プロレタリアートおよびそれと同盟する諸グループによる民主的支配と同一視されるほど、幅広く解釈されていた。<sup>(9)</sup> ロシアのポリシエヴィズムは、住民の大多数のみならずプロレ

タリアート自身の大多数にも対立する方向の独裁とみなされ、そのために退けられたのであった。たとえば、オーストリア社会主義の最有力な左翼理論家の一人マックス・アードラー Max Adler は、ポリシェヴィズムが「激しい、ダイナミックな」ものであることを認めながらも、マルクシズムからの一種の逸脱としてこれを拒否し、「たえざる政治的・経済的啓蒙運動」および「知的改革」にもとづく「マルクス主義の古いやり方」を、社会主義を達成するための正しい方法として賞賛している。<sup>(11)</sup> オットー・バウアーも、ドイツの社会主義者カール・カウツキー Karl Kautsky にかんする分析のなかで、ポリシェヴィキ的方法の拒否をはっきり示している。バウアーによれば、ポリシェヴィズムは出版の自由や言論の自由を排除するものであり、またテロリズムと不可分の関係にある。カウツキーは「物質的生産の点で共産主義を」弁護し、「知的生産の点でアナキズムを」弁護しているが、しかしバウアーにとっては、ポリシェヴィキからののはっきりした離別は不可避であった。その理由の一つとして彼は、特に「現在の大衆のムード」がむしろソ連に敵意をもち、これを嫌っていることをあげている。<sup>(12)</sup>

(一) HNSA, Ex 887, Folder: Innere Lage in Ungarn: Cnobloch, März 22 および電話で与えられたバウアーの訓令の控え。

(2) こうした主張は、以後数カ月間、オーストリア社会主義の指導者たちによって繰り返えされることになる。彼らは、オーストリアが連合諸国に左右されていること、連合諸国は中欧のまっただ中にソヴェト共和国を樹立することを決して許さないであろうこと、弱小なオーストリアは、有力な力であるよりはむしろ歴史における一つの抵当物であること、従ってオーストリアにおける革命的行動には鋭い制限があることなどを、再三指摘している。フリードリヒ・アードラーは一九一九年五月に、「ドイツ系オーストリアにおけるプロレタリアートの機会は、こんにちではむしろささやかなものである」と述べている。『Schicksalschwere Entscheidung', Der Kampf, Mai 24, 1919, S. 306. 同じ月の他の論文の中で、彼はまた次のように書いてゐる。「われわれ貧しいドイツ系オーストリア人は、無力である。現在の大きいなる世界の諸事件のなかで、われわれは単に世界史の客体であるにすぎない。……われわれは押しつつあるのではなくて、単に押されているだけである。われわれの運命はわれわれ自身の手中にあるのではなくて、ほとんどもっぱら国際情勢に依存してゐる。」『Machtfragen und Formfragen', ibid., Mai 3, 1919, S. 242

—244. R. Hillering 著、オーストリアの将来は西側の決定次第であるという同じ見解を述べている。「社会革命の運命は、究極的には戦勝諸国になつて決定される。」「Die Internationale,» *ibid.*, August 9, 1919, S. 570.

- (3) Low, "Austria between East and West," p. 50.
- (4) Pravda, March 24.
- (5) Arbeiter-Zeitung, März 23.
- (6) Soziale Revolution, März 26.
- (7) *Ibid.*
- (8) Arbeiter-Zeitung, März 23, "Ungarn und wir."
- (9) Low, *op. cit.*, p. 51.
- (10) Max Adler, "Sozialismus und Kommunismus," *Der Kampf*, 1919, S. 253f.
- (11) *Ibid.*, S. 252f.
- (12) "Karl Kautsky und der Bolschewismus," *ibid.*, Oktober 11, 1919, S. 664—667.

### 三 ハンガリー共産政權の働きかけとオーストリアの対応——第二期

オーストリア社会民主党のソヴェト・ハンガリーに対する基本的態度は、前章で考察したとおりであるが、その後の情勢の変化に伴って、微妙な変動をみせたことも、たしかである。結論を先にいえば、以後数週間のうちに、「労働者新聞」および党の理論的雑誌「闘争」*Der Kampf* では、ハンガリー独裁の方法がますます疑問視されるようになり、やがてあからさまにそれを拒否するまでに至った。これらの新聞・雑誌では、ハンガリー政權のきびしさ、プロレタリアート自身に対する独裁的な取扱ひ方を非難し、究極的成功の見込みについても疑念を示すようになり、しかもその頻度は次第にふえていった。最後には、ハンガリー政權がオーストリア人に対してもオーストリアの労働者に

対してさえも自己の意志を容赦なく押しつけようとする乱暴なやり方が問題にされ、それらは国際法および国際的慣習に違反するばかりでなく、プロレタリアートの団結にも反する企てであるとして、公然たる非難の声があげられたのである。そこでわれわれは、「労働者新聞」の紙面ではしばしば爆発した激怒の背景、すなわち、ソヴェト・ハンガリーのオーストリアに対する激しい働きかけを具体的に検討するとともに、オーストリア社会民主党のそれに対する反応をさらに立ち入って考察しなければならぬ。

ハンガリー・ソヴェト政権の主要な目標は、国境を越えて共産主義の宣伝と扇動を進めることであつた。新政府は自己の立つ地盤の弱さを知っていたから、共産主義の狭小な基地を近隣諸国特にオーストリアに拡張することこそ、みずから生き残るための唯一の道であると考えたのである。ブダペスト駐在のオーストリア公使クノップロツホは、ソヴェト政権が樹立された約二週間後に、パウアー外相への報告で、この点を次のように強調している。

「ハンガリー政府の主要な努力は、すべての近隣諸国、まず第一にドイツ系オーストリアを共産主義に導く方向に向けられている。きわめて急進的なハンガリーの支配者たちは、この目標に到達するためには、いかなる犠牲をも辞さない。外国での宣伝が……外交政策における唯一の活動なのである。……ドイツ系オーストリアに向けられた扇動は、利用しうるあらゆる手段を使って行なわれている。扇動家たちは、党指導者の命令をオーストリアにいる彼らの腹心の友にたえず伝達している。列車、自動車、飛行機、金融機関、パンフレット、新聞は、無制限にいつでも彼らの役に立っている。ソヴェト・ハンガリー政府が成立した日以来、『ドイツ系オーストリア』の欄が、諸新聞のなかで驚くべき大きなスペースを占めている。運動の『発展』について詳しい報告のない日は、ほとんど一日もない。」ハンガリーの共産主義者のサークルでは、「ドイツ系オーストリアはまもなく反動的な方針を捨て、社会主義運動への反逆者たち——それらのなかには、普通は首相や外相の名前も載せられている——を完全に一掃するであろう」という期

待がもたれている。

さらに四月七日には、公使は次のように報告している。「最近、公的な性格の一連の声明は」、ソヴェト・ハンガリー政府内の最有力な人々が「外国での宣伝」を「最も重要な課題」と考えていることを、はっきり示している。「ポガニー Pogany は『われわれは革命を国境外にもち出さなくてはならない。なぜなら、社会革命は世界革命でしかありえないからだ！』と語っているし、同じ会議でクンフィ Sigmund Kunfi は『もしわが隣国の一つが速やかにわれわれの例に従うならば、その場合には、今日の資本主義的生産の危機において、共産主義の洪水は全世界に拡がるであろう』と述べている。」その他、ペーラ・クン、アレクサンダー・ガルバイ Alexander Garbai ウィルヘルム・ベーム Wilhelm Böhm らの数多くの発言も引用されたが、いずれも、ハンガリー国境を越えて共産主義を拡大することへの全面的関心を示すものである。ベームは、プロレタリア革命は『ハンガリーから西に向かって勝利の前進をはじめ、ドイツ系オーストリア、ベーメン、ドイツを征服し、協商諸国にも浸透しなくてはならない。』外務人民委員会のとっている政策は、本当に、これら多くの類似した発言に呼応するものである」と述べている。この宣伝は、いうまでもなく第一にドイツ系オーストリアに向けられた。「現政府の指導的な人々は、この宣伝の成功を確信しており、ごく短時間のうちにドイツ系オーストリアの政府を打倒できると思っていることを、隠しはしない。」<sup>(3)</sup>

こうした認識にもとづいて、クノッププロホ公使はウィーンに数々の警告を送った。まず四月四日<sup>(4)</sup>に彼は、今後十四日以内にオーストリア政府に対して計画的な暴動がおこされるということを、確実な筋から聞いた、と書き、十三日には、「ペーラ・クンの側近から」<sup>(5)</sup>十六日を目ざしてウィーンで襲撃が準備されていることを知った、と報告し、「先日お知らせした、ハンガリー政府の使者たちの驚くべき数の旅行は、このことと関係があるかもしれない」と述べている。またその一〇分後にウィーンに届いた電文のなかで、クノッププロホは、ハンガリーの陸相が、オーストリア

行のウィザを望んでいるクン、ポガーニユ、ベーム、ヤコブ・ヴェルトナー Jacob Weltner を含む一三人の官吏の旅券をたつた今提出したと通知し、ウィザを与えるべきか、それともならかの技術的根拠にもとづいて拒否すべきか、について訓令を求めた。二日後、クンとポガーニユはおそらくオーストリアに向かわないだろうと報告されたが、しかしこれは、少なくともひととき、クンがウィーンでの暴動計画を、みずから主役として関与するに足る重要性をもつものと考えていたことを示しているように思われる。その際公使は明らかに驚き、「ここで始まっている扇動の程度からみても、ハンガリーとの現在の親密な関係（外交関係、通商、旅行）が続くならば、ドイツ系オーストリアは共産主義者の襲撃の危険から身を守ることができる」かどうか、という疑問を提起し、「この疑問に対する答えは、わたしの考えでは、ただの一時間も猶予さるべきではない」としている。

公使の警告には十分な根拠があつたし、彼の恐怖も正当なものであつた。四月中旬、実際に重大な共産主義者の脅威がおこつたからである。この月の十七日、リング通りのオーストリア議会前で大規模なデモが行なわれ、議会の建物が襲撃されて燃えあがり、続く交戦のなかで六人が殺され、五六人が重傷を負つた。このとき、社会民主党の陸相ユリウス・ドイチュ Julius Deutsch は、国民防衛隊 Volkswehr を召集し、短時間のうちにデモ参加者を追い散らし、暴動を鎮圧した。そのあと、ウィーンの全新聞はこの新軍隊を高く賞賛した。ウィーンの中央労働者協議会中の共産主義者は、内閣の社会民主党閣僚に対する不信任投票を要求したが、圧倒的な敗北を喫した。

四月中旬はミュンヘンにレーテ共和国が成立した直後のことであり、オーストリアはバイエルンとハンガリーのソヴェト共和国に「はさまれた」形になり、プラウダは、「オーストリアはいまや両面から……革命の火にとらえられるであろう」と予言し、「ドイツのプロレタリア革命の勝利は、ごく近い将来の問題である」と喜んでいた。三月に成立したコミンテルンの初代議長ジノヴィエフ G. Zinoviev も、第三インターの「洗礼」の直後に二つの新ソヴェト共和

国がロシア共和国の仲間にはいったことを祝福し、「古いヨーロッパは熱狂したテンポでプロレタリア革命に向かつて疾走している」と述べ、レーニンも同様に考えていた。この重大な時期にオーストリア共産主義者の暴動が失敗したことは、中欧における共産主義運動全体にとって縮くずれの発端ともいふべきものであった。

四月十七日事件の余波として、ブダペストとウィーンの間では、白熱した新聞の論戦が行なわれ、外交上の覚書の十字砲火が交された。「労働者新聞」は、「ハンガリー政府はまったく信じがたいやり方でウィーンで扇動を行ない、無礼にもわが共和国の国内問題に干渉している」と非難し、他方ハンガリー政府は、ブダペストのオーストリア大使館に抗議を行ない、オーストリア政府がオーストリアの地からハンガリーの反革命を支持し、ソヴェト政府についての非友好的な敵意にみちた論説をオーストリアの新聞に発表しているとして、これを非難した。<sup>13</sup>しかしオーストリア政府はこれらの非難を、「正当な理由も証拠もないもの」として退け、「現在のハンガリー政治体制に反対するいかなる革命的陰謀をも」支持していないことを力説し、逆に、ソヴェト政権がその内密の計画で、「無視できない手段」と「国家機関」を使ってドイツ系オーストリア国の土地に干渉しているという、反対告発を行なった。そしてオーストリア政府は、両国間の論争を落着させるために、これらの論争を仲裁裁判所に委ねるべきことを示唆し、ハンガリーのソヴェト政府が国際法に違反するやり方でオーストリアの国内問題に干渉していることを証明する書類を、進んで仲裁裁判所に提出する用意があると声明した。

四月中旬の失敗ののち、ハンガリーの共産主義者は次の有望な目標として五月一日に目を向け、この日をめざす計画は順調に進んだ。五月三日のクノッップロッフ公使の報告によれば、彼はシルバーマン Silbermann の署名のある一九一九年四月十六日付の文書を手に入れたが、それは、五月一日を目標にした共産主義者の計画を露呈したものであった。それはまた、ブダペストにあるオーストリア共産党の手先のものがハンガリーの外務省と協力していたばかり

でなく、ハンガリー外務省の部局の指令をウィーンの同志あてに送っていたことをも示していた。「命令第十九号」の名をもつこの文書は、それに続く四月三十日付のウィーンの共産党本部の「命令第二十号」とともに、ハンガリー外務省とオーストリア共産党指導部の間の共謀をうかがわせるものであり、五月一日の暴動のための準備の大きさを明示するものであるといわれている。

以上のようなソヴェト・ハンガリーのオーストリアに対する扇動や干渉が、オーストリア社会民主党の不满をよんだ背景であり、「労働者新聞」の紙面ではしばしば激怒が爆発したのも、無理からぬことであつたといえよう。しかしその反面注目されるのは、概していえば、ソヴェト政府をあまりにもきびしく批判することには依然躊躇がみられ、かなりの抑制が加えられていることである。このような傾向はやはり、隣国ハンガリーの「プロレタリア的」社会主義的「政権に対してオーストリアの労働者たちが同情の気持を抱いたことを示すものであり、この政権が資本主義や帝国主義の侵入を防いでいるのに、それを中傷するのは好ましくないという気分に裏づけられたものであつた。さらに、ソヴェト政府のオーストリア国内問題に対する干渉に不満はあるにしても、ハンガリーを激しく攻撃することによって、オーストリアが自国に絶対必要と考えられる中立路線を逸脱することになつてはいけなしいという配慮も、働いていたと思われる。次章では、これらの諸点についてさらに立ち入った検討が行なわれるであらう。

(一) 五月六日のイズヴェステシアの次の言葉は、決定的な意味をもつものといえる。「もしロシア・ソヴェト社会主義共和国が世界革命運動の諸条件のもとでのみ安全でありうるならば、ハンガリーとバイエルンの将来については、ひとはいっそう大きな権利をすらもつて、同じことを要求してもよいであらう。」ハンガリーの共産主義指導者たちのオーストリアにかんする公式の声明や活動は、ロシアの分析や政策勧告と完全に一致していた

(2) HISA, Ex 881, Liasse Ungarn I, 3: Cnobloch, April 4.

(3) Ibid, April 7.

- (4) Ex 262, Präsidialakte des Staatssekretärs Dr. Bauer, Folder ix, April 4.
- (5) Ibid., April 13.
- (6) Ibid., April 15.
- (7) ウィーンの協商国代表たちも、同様に「脅威が差し迫っていることをよく知っていた。四月十三日付の「新自由新聞」Neue Freie Presse はカニンガム大佐とのインタビューを載せたが、そのなかで大佐は「もし「政治的不安」が拡がるならば、食糧を含むいかなる種類の輸入品もあてにされえないであらうと警告している。四月中旬の衝突の直後に、さらに暴動がおこるのを防止するために、これらの警告の言葉を用いたブラカードが、ウィーン市内の壁や掲示板に配置された (Ibid., April 19)。協商国はつづはじめから、中欧の政治的・社会的な闘争において食糧が決定的な重要性をもつことを「十分認識していた。Herbert Hoover はハリーの五大国代表団長たちに語りかけて、「オーストリアに食糧を送るにあたっての「連合国の援助」のみが、「これ\*でオーストリアをポリシエツェイズムから救わなければならない」ことを「指摘している。(For. Rel. U. S., Paris Peace Confer., VII, 174.)
- (8) Reichspost, Wien, April 18, Neues Wiener Tagblatt, April 19 など参照。四月中旬のユリウス・ドイチュの有効な反共産主義的対応については、H. Benedikt (hrsg.), Geschichte der Republik Österreich, Wien 1954, S. 53 参照。
- (9) Neues Wiener Tagblatt, April 8.
- (10) Pravda, April 9.
- (11) G. Zinoviev, "Perspectives of the Proletarian Revolution," Kommunistischeski International, No. 1, May 1919, p. 38; Low, op. cit., p. 184.
- (12) Arbeiter-Zeitung, April 2,
- (13) Ibid., April 22 und 24.
- (14) Ibid., April 26.
- (15) HHSÄ, Präsidialakte, Folder ix, Bauer, Mai 27.

#### 四 ハンガリー共産政権の働きかけとオーストリアの対応——第三期

本章では、五月と六月の事態の変化を辿りながら、オーストリア社会民主党の態度をみてゆくことにする。

五月一日は、行動の延期が指令されたことによって平静に過ぎた。そしてこのころから、オーストリア社会民主党は、中欧の共産主義の高潮はすでに去ったという見解をもつようになり、五月中にハンガリー赤軍のチェコ軍に対する反撃が開始されて、ソヴェト・ハンガリーの軍事的状況が改善されたことも、この見解を変化させはしなかった。五月二十七日のクノップロッフ公使にあてたオットー・パウアーの訓令は、国内の共産主義者の襲撃についてオーストリア政府の恐怖が減少したことを、はっきり示している。しかしそれと並んで注目されるのは、オーストリア政府がハンガリー・ソヴェト政府の早期打倒になら興味をもたなかったことである。パウアーの説明によれば、

「(1)西部ハンガリー問題については、協商国に顔を向けた政府に実際に支配されるハンガリーよりも、ソヴェト・ハンガリーの方がわれわれにいっそう有利なチャンスを与える。」<sup>(1)</sup>ソヴェト・ハンガリーが存在するかぎり、協商国はオーストリアの種々の要求をより、好意的に眺め、オーストリアの経済的・政治的諸問題について、住民の大多数の反対する解決を強いることもないであろう。協商国は、主にドイツ人の住む西部ハンガリーを、いっそう快くオーストリアに与えるかもしれない。協商国はまた、自己に好意的なハンガリーがなければ、ドナウ連合を樹立することもできないであろう。(ドナウ連合は多くの西側諸国に支持されたが、ドイツ共和国との Anschluss を熱望するオーストリアの社会民主党は、これに強く反対していた。)

「(2)ソヴェト政府の打倒は、協商国がわれわれをドナウ連合に強制的につれこむことをいっそう容易ならしめるであろうし、それによって Anschluss を当分の間不可能にするばかりでなく、その後はいっそう困難にするであろう。」しかし、もし万一ソヴェト政府が「われわれの講和条約締結後に」打倒されるならば、オーストリア社会民主党は、「われわれの希望どおりに」ドイツとの「関係を自由に調整することができ」であろう。

「(3)ソヴェト政府の打倒は、ドイツ系オーストリアの反革命運動に勢力を得させるだけであり、内乱の危険をよ

びおこすであろう。……ハンガリーにおけるソヴェト独裁は、現在のドイツ系オーストリア政府の存立にとって、もはや危険を与えるものではない。……共産主義の波は退潮している。」

しかし、このパウアーの見解とは反対に、共産主義の潮は六月中旬までにふたたび盛り返していた。四月中旬のウィーン襲撃失敗のあと、すでにふれたように、オーストリアの共産主義者たちはいっそう注意深く新しい暴動の計画を進めていたが、その準備はまたしてもブダペストで始まった。クンは五月、ベッテルハイム *Bettelheim* をソヴェト・ハンガリー共和国の代表としてウィーンに送ったが、彼はオーストリア共産党の執行部を解散させ、彼らの手から指導権をもぎとることに成功し、秘密の「役員会」をつくり、共産主義者による権力掌握の計画を立てた。共産主義者は彼ら自身の軍事力をもってはいなかったが、オーストリアの新軍隊「国民防衛隊」の若干の部隊のなかには、かなりの共産主義崇拜者があった。

協商国が六月十五日までに「国民防衛隊」を二五%削減するよう要求してきたとき、共産主義者は早速この問題をつかまえて、オーストリア政府を大いに困惑させた。「国民防衛隊」の人員削減は、解雇されるはずの人々から反対されたばかりでなく、全軍隊のモラルにも有害な影響を与えることは必至であったが、とりわけ労働者たちは、「国民防衛隊」をオーストリア共和国において新たに獲得された自己の地位の保証とみなしていたから、人員削減に強い反感を示した。ウィーンの兵士協議会では普通社会民主党が圧倒的多数をしめていたのに、この問題にかんする集会では、社会民主党支持一七四票に対して共産主義者支持七一票という数字になり、共産主義者の主張が大きくアピールしたことを示した。

オーストリア内閣の社会民主党閣僚は、国内でオーストリア共産党が権力を掌握すると同時に、オーストリアとハンガリーの国境地方をハンガリー軍が占領するという共産主義者の計画をキャッチして、六月十二日、「国民防衛隊」

の削減について協商国側に緊急の申入れを行ない、協商国もついにその態度を変えたが、共産主義者に促進された抗議運動の勢いは、もはや止められなかった。彼らは今一度兵士たちにアピールを行ない、労働者協議会の独裁を要求し、六月十五日をめざして公然と襲撃の準備を進めていった。

一方クン自身は、ブダペストからいろいろな工作を行なっていた。六月十一日、彼はウィーンの兵器庫協議会に電報をうち、ヴェレルスドルフ Wollersdorf の軍需工場で作られた軍需品が、ハンガリー赤軍に対して使用する目的でチェコ国境に送られるのを防ぐように、労働者たちに要求した。同時に彼は、オットー・パウアーに覚書を送り、ハンガリーの反革命護衛隊がハンガリーに侵入する目的でオーストリアのシュタインブリュック Steinbrück に集結しつつあると抗議した。ウィーンの「国民防衛隊」が動員解除の脅威に反対してデモを行なったとき、クンはその「英雄的闘争」に「深い同情」を表明する電報を司令官あてに送り、「プロレタリアートが権力を握り社会を改革しはじめることがおそければおそいほど、社会主義への転換はそれだけいっそう君たちに困難になるだろう」と述べた。彼はまたオーストリア共産党に、「昨日のデモ」と「その啓蒙活動」を祝う電報を送り、同時に、「流血なしにプロレタリアート独裁を打ち立てることは、君たちの手中にある」と<sup>4)</sup>気合いをかけた。

差し迫った襲撃を前にして、オーストリア社会民主党の指導者たちは先手を打つことを決意した。社会民主党の内相エルデルシュ Eidersch は、六月十四日から十五日にかけての夜間に一一五名の共産党指導者の逮捕を命じ、十五日の夕方には、ユリウス・ドイチュの命を受けた「国民防衛隊」の諸部隊が市の中心部を占領していたが、共産主義者の多い第四十一大隊は兵営に閉ちこめられていた。しかしこれらの予防措置にもかかわらず、流血はさけられず、五千名のものが警察本部を襲撃しようとし、二〇名の死者を出した。

ソヴェト共和国の建設を唱えたオーストリア共産党が、ハンガリーのポリンシェヴィストに助けられて六月十五日に

行なった権力掌握の試みは、このようにして抑圧された。六月十六日の「労働者新聞」の論説は、共産党をひどく非難した。共産主義者の四人委員会は、兵士たちに「武器を手にして」デモに参加するよう訴え、「労働者階級がそれを拒否していたのに、権力の掌握を」あえてした、というものである。

ウィーンの騒擾のあと、公的には、ウィーンとブダペストの間で外交上の覚書合戦がふたたび高潮に達した。ところでオットー・パウアーは、翌十六日、次のような半ば私的、半ば公的な手紙をクンに送ったが、これは、表面の尖鋭ではげしい外交文書の交換とは対照的に、むしろおだやかな言葉で、クンとソヴェト政府に、ポリシェヴィズムの拡大に反対する彼およびオーストリア社会民主党の決意を、はっきり知らせたものである。その際が、単に諸事実の提供に限定し、結論を引出すことを相手に委ねている点も、注目される。この手紙は、パウアーの見解をうかがううえに重要な多くの論点を含んでいるので、その大部分を引用することにする。

「まず第一に、ドイツ系オーストリア国内のわれわれの状況についていえば、わたしは、わが国におけるプロレタリアート独裁を、現段階では不可能であると考える。それは次の諸理由によるものである。(1)ドイツ系オーストリアはなんら国家ではなく、諸地方の非常にゆるい団塊なのであり、……諸地方は社会的にウィーンとまったく異なっている。ウィーンを憎み、プロレタリアートの力の基礎である首都、諸地方から食糧を奪う首都を振り払いたいという考えを、日々もてあそんでいる。ほとんど町もない諸地方における労働者の力は、これらの遠心的傾向を克服するに足るほど大きくはない。労働者階級さえもウィーンへ余剰食糧を輸出することを妨げる傾向があり、またみずから分立主義的傾向の影響を受けることを好むから、その力はいっそう小さいのである。それゆえ、ソヴェト独裁が宣言されれば、圧倒的に農民が住みそれゆえに聖職者的・農業的である諸地方が直ちにウィーンから分離する結果になることは、まったくありそうなのである。……プロレタリア政府の権威はウィーンおよび、ウィーナー・ノイシ

エタット Wn. Neustadt やシユタイエルマルクの工業地域に限られるであろう。従つて、こうした地域への食糧供給は、文字どおり不可能になるであろう。そして、飢えに迫られて、独裁はきわめて短時間のうちに倒れるであろう。

(2) ウィーンおよび工業地域への給食は、協商国からの輸入に依存している。しかし協商国は、ポリシエヴィキのドイツ系オーストリア国を公正な被保険者とは考えないというただそれだけの理由で、輸入を止めるであろう。食糧の輸入を止めるだけで、悲惨な餓死が生ずるであろう。同時にチェコスロヴァキアおよびポーランドからの石炭の輸入も中止されるであろうし、ガスや電気事業それにすべての工場は、直ちに停止しなければならぬであろう。二、三日後には、家庭や台所用の石炭さえも乏しくなるであろう。飢えと餓死に脅かされて、大衆はふたたび独裁に反対して立ち上がるであろう。

(3) 協商国に向かいあっているわれわれの軍事的状況は、ハンガリーのそれとはまったく異なっている。協商国は、ウィーンによってチェコスロヴァキアおよびポーランドから遮断されることを甘受するわけにはゆかない。なぜなら、その場合には、彼らの権力構造全体が崩壊するであろうから。協商国にとっては、ウィーンはブダペストとは比較にならないほど重要な場所である。<sup>(8)</sup> そのうえまた、協商国にとっては、ハンガリーを抑圧するよりもわれわれを抑圧することの方がずっと容易であるだろう。協商国は、赤軍を組織する時間をわれわれに与えずに、まっ先にわれわれを占領するであろう。……軍事的には、これは非常に容易であろう。イタリア人はティロールとケルンテンを占領している。……二、三日以内に彼らは、数個旅団をウィーンへ動かすことができるだろう。チェコ人はウィーンから急行列車でわずか一時間のところにあり、鉄道網をいちべつすれば、ウィーンに対する軍事行動は、彼らにとつて、スロヴァキアにおけるいかなる軍事行動よりも容易であることがわかるのである。たしかに、全体の軍事行動には、わずか三個師団が必要であるにすぎないだろう。チェコ人とイタリア人は、彼ら自身の間で、それだけの軍隊を

難なく集めることができるであろう。イタリア軍は行動する準備ができていし、イタリアには「その気があるだろう。なぜなら、それは一般に、ドイツ系オーストリアを経済的搾取の地域にしようとするイタリアの計画の一部だからである。」それゆえ、オーストリアにおけるソヴェト独裁が外国列強による「占領」を伴うということは、「きわめてありそうなこと」である。

「こうした事情のもとで、わたしは、非常にまもなく敗北とプロレタリアートの完全な武装解除に終わると思われる冒険をさけることが、われわれの義務であると考える。われわれの義務は、待つこと、諸事件の今後の経過が決定的な計画のチャンスをいっそう有利らしくするまで、プロレタリアートの力と資源を保存することであるように、わたしには思われるのである。」続いてパウアーは、ヨーロッパおよび世界全般におけるさまざまな路線の論議に移り、ヴェルサイユ講和条約にかんするドイツ国民の決断は差し迫っているが、これこそ中欧革命の運命に対して決定的な重要性をもつものであることを、指摘する。その時まで、「小国にいるわれわれは、われわれの戦闘力を保有することしかできない。……わたしはハンガリーの諸事件を、最大の共感をもって考えるものである。ハンガリーのあらゆる反革命は、われわれにとって最大の脅威であるだろう。反対に、ここでの反革命の勝利もしくは外国軍隊によるわが国の占領が、オーストリアをハンガリーに対する攻撃基地にするであろうように。われわれの運命のこのようなつながりは、あらゆる見解や戦術の相違にもかかわらず、われわれの間に広範囲な利害の一致を打ち立てる。これらの相違は、わたしの見解では、経済的・軍事的状況の相違に由来するものである。……」

ここにみられるパウアーの見解は、基本的には、ハンガリー・ソヴェト政権の成立直後に彼がクノップロッフ公使に与えた指令、三月二十三日の「労働者新聞」の論説などにみられるものと大差ないといってよい。ここではたしかに、オーストリアの社会主義とハンガリーのポリシェヴィイズムの相違が単に戦術的なものとして極小化され、また両

国間に存在する「広範な利害の一致」が保証されているけれども、しかしこの利害の一致はむしろ地政学と歴史に、すぐる戦争に際しての戦友關係に、また遠い先の社会的・経済的ゴールに根ざすものであって、オーストリアが共産主義路線を即座に採用することを必要とするものではなかったから、この手紙がクンを満足させなかったことはいうまでもない。しかし、オーストリアにおけるポリッシュウィズムの襲撃が成功した場合おこりそうな協商国によるオーストリア占領は、ソヴェト・ハンガリー自身の軍事的状況を危険にさらすおそれがあることを、パウアーがこの手紙で力説し、ソヴェト・ハンガリーにこれを気づかせようとしている点は、重要である。

しかしながら、パウアーのこの指摘は、大した効果を發揮しなかった。ソヴェト・ハンガリーとオーストリア共産党は、六月中旬の失敗に落胆することなく、急速な立ち直りの準備を進めていたようにみえる。六月十九日に、イギリス代表カニングムは、オーストリアの連絡将校ザイラー Seiler に次のような情報を伝えた。それは、六月十七日にウィーンのハンガリー大使館で、ブダペストからの命令により、近い将来をめざす行動計画が決定された、というもので、「内外の連繫活動によってウィーンにポリッシュウィキの襲撃をおこさせ、……プレスブルクに対する新しい作戦基地を獲得するばかりでなく、ウィーンの富裕な金融機関をも手に入れようとする」のが、その内容であった。この新しい共産主義者の暴動は、同時に行なわれるフェルドバツハ Feldbach、ウィーナー・ノイシュタット、ムル河畔のブルック Bruck a. d. Mur に対する赤軍の行動と組合わせて、六月二十四日から二十六日までの間に計画されていた。カニングムはこの報告がきわめて重大なものであることに注意を促し、「オーストリア政府が自己の兵力でこの計画の実現を阻むことができる自信があるかどうか、それとも協商国からの援助を必要とするかどうかを、できるだけ早く」知らせてほしいと要望した。これに対してオーストリア政府は、「われわれは自分の軍隊でわれわれ自身をそれだけいっそうよく守ることができるだろう。……なぜならわれわれは、「国民防衛隊」をあてにすることができるし、

さらにドイツ系オーストリアの全人民の抵抗をあてにすることができるとある」<sup>(9)</sup>と伝えて、カニングムを満足させた。

ここで、当時のオーストリア労働者の実情に目を向けよう。六月末から七月はじめにかけて開かれたオーストリア労働者協議会の会議は、オーストリア共産党、ソヴェト・ハンガリーおよびモスクワのコミンテルンに、新たな失望を与えた。この時期のオーストリア・ソヴェトの態度は、大体において社会民主党のそれと同じであることが判明したからであり、共産党の新聞「社会革命」*Soziale Revolution* の論説は、この態度を「何よりも先ず協商諸国の革命を待ちうけるもの」と批判し、オーストリア社会主義の指導的人物の一人フリードリヒ・アードラーの態度について、特別な遺憾の意を表明した。共産主義者がオーストリアでのソヴェト共和国建設を主張してシャイデマンやノスケのドイツとの合併に反対していたのに、アードラーは「ヴィルヘルム二世もシャイデマンもノスケも、何人といえども、われわれがドイツを社会主義的なドイツにすることを妨げない」という強い期待をもって、ドイツとの合併に躊躇しなかったし、またオーストリア共産党がアードラーに党首になってほしいと申し入れたとき、彼はこの申し入れを断って、共産党をひどく落胆させていた。そこで「社会革命」の論説は、「オーストリアのレーニンになる能力のある」フリードリヒ・アードラーが、オーストリアのノスケになったことを嘆いたのである。<sup>(10)</sup>

オーストリアのソヴェト会議が攻撃的な革命活動にかかり合うことを拒否したのは、政府の外交政策をある程度反映したものであった。当時オーストリアは食糧や原料について協商国に依存していたので、慎重に行動せざるをえず、特に平和条約が起草されつつある段階では、反西方的政策を追求する余裕はなかった。政府はしばしば西欧の「帝国主義」を熱心に批判したけれども、自己の安全に対する真の脅威はむしろ東方から来ると信じていた。そのため、ロシアとハンガリーをバイエルンのソヴェト根拠地と連結し、プロレタリア革命を中欧地域へさらに拡大しよう

とするコミンテルンの猛運動とは、衝突せざるをえなかったのである。

ソヴェト・ハンガリーに対するオットー・パウアーの態度について、最後に付言しておく必要があるのは、それが Anschluss への希望によって広範囲に規定されていたことである。彼はオーストリアでのレーテ共和国樹立を拒否したけれども、ハンガリーのソヴェト共和国には反対でなく、むしろその政治的効果に期待をかけていた。まず彼は、ソヴェト・ハンガリーに対する恐怖がオーストリアのブルジョアのサークルを Anschluss 支持の気持に傾かせるであろうと考えた。さらに六月のクンおよびカール・レンナーあての手紙をみれば、明らかにパウアーは、協商国がハンガリー・ソヴェト共和国との長期にわたる対決のうちに、Anschluss 反対の意志を弱め、平和交渉の際オーストリアの Anschluss 要求をむしろ容認するであろうという期待をかけていたことが、知られるのである。<sup>(2)</sup>

のみならず、ハンガリーの政情は、オーストリア国内の政治的力関係にも顕著な反作用を及ぼさずにはおかなかった。四月半ばにルーマニア軍とチェコ軍のハンガリー攻撃が開始され、五月はじめにははやくもルーマニア軍がブダペストにせまり、ソヴェト・ハンガリーは壊滅の危機に直面した。そして五月五日には、フランス軍占領下の南部ハンガリーのセゲド Szeged に反革命政府がつくられ、ホルティ Miklos Horthy が陸相として参加し、「国民軍」を組織してブダペスト入りを準備していた。パウアーは、ハンガリーにおける反動的・復古的勢力の強化がオーストリアにおける社会民主党のもろもろの可能性に制限を加えるであろうことを、よく知っていた。五月六日のカウツキーあての手紙で、彼は次のように述べている。

「わたしは今、二重の重荷を負わされている。講和の準備と社会化がそれであるが、双方とも状態はよくない。なぜなら、ブダペストにおける挫折がここでも不平家のブルジョアジーを力づけ、われわれを弱めているからである。Anschluss が成立しないならば、オーストリアはみじめな農民国家となり、そこでは、政治を行なうことは苦勞に値

しなくなるであらう。」<sup>(15)</sup>

パウアーはまた、チェコの社会民主党がハンガリーのソヴェト共和国に有効な援助を与えなかったことを批判し、一九一九年春のチェコスロヴァキアにおけるプロレタリア革命は、「全中欧における革命の諸力を鎖から解き放したであらう」と述べている。その後も彼は、外相として、ソヴェト・ハンガリーに対する外国の干渉を支持しようとするいっさいの試みに強く反対し、チェコスロヴァキアに武器を用立てることを拒否した。これは、オーストリアを中欧における政治的デモクラシーの拠点にするとともに、東西間の中立のとりでにすることを望み、新たな戦争に巻き込まれることを極力避けようとしたことの表われであった。しかし、ソヴェト・ハンガリーを抑えようとする協商国および近隣継承諸国にいっさいの援助を拒否したことは、パウアーとソヴェト・ハンガリーの結束を示すものと解され、オーストリアの外交政策に一つの厄介な重荷を負わせる結果になったことは、シュタイナーの指摘するとおりである。

- (1) HHSa, Präsidialakte, Folder ix, Bauer, Mai 27.
- (2) Bettelheim 22(2)222は O. Bauer, Die österreichische Revolution, Wien 1923, S. 138—142 参照。
- (3) Soziale Revolution, Juni 12.
- (4) Ibid. 続いてスーラ・クンは、次の電報をウィーンの共産主義者役員会に送った。「わたしはすべての準備を完了した。機敏に勇気をもって前進せよ。生か死かは成行きにかかっている。」O. Bauer, Die österreichische Revolution, S. 149.
- (5) Arbeiter-Zeitung, Juni 16.
- (6) HHSa, Fasz. 262, Präsidialakte, Folder IX, ixb “Ungarn und Varna,” Juni 16.
- (7) 一九一八—一九年に分立主義者の勢力が特に強かったりは、Tyrol, Vorarlberg および Salzburg の諸州であった。
- (8) 四月危機のクライマックスに、カニンガム大佐はまさにこのことをパウアーおよびオーストリア政府に強調していた。Neue Freie Presse, Abendblatt, April 18.

- (9) HNSA, Ex 881, Ungarn 1/10, Folder : Truppenkonzentrationen an der westungarischen Grenze, Report Juni 20.
- (10) Arbeitererrat 1919, Handschriftliches Protokoll der Verhandlungen, S. 190, Verein für Geschichte der Arbeiterbewegung : Herbert Steiner, "Otto Bauer und die 'Anschlussfrage' 1918/19", in Die Auflösung des Habsburgerreiches, Wien 1970, S. 475f.
- (11) Soziale Revolution, Juni 28.
- (12) HNSA, Bauer-Nachlass, Brief an K. Renner und Béla Kun, Juni 1919; Steiner, op. cit., S. 477.
- (13) International Institute of Social History, Amsterdam, Briefwechsel Karl Kautsky DII 506, Mai 6, 1919; Steiner, ibid.
- (14) O. Bauer, Die Aufgaben der deutschen Sozialdemokratie in der Tschechoslowakischen Republik, Teplitz-Schönau 1921, S. 7 u. 9. しかし「バウアーは、自国オーストリアでは、多くの論拠をもち出して、プロレタリア革命の弁護者たもに反対しており、これは、すでに考察したとおりである。」
- (15) Steiner, op. cit., S. 478.

## 五 ハンガリー・ソヴェト共和国の結末とオーストリア

本章の課題は、ソヴェト共和国の最終段階におけるハンガリーとオーストリアの関係を検討することである。

七月になってハンガリーのソヴェト共和国の情勢が急速に悪化したとき、コミンテルンは七月二十一日をめざして世界的規模のゼネストを指令した。これがソヴェト・ハンガリーの援護を意味したことは明らかであるが、ウィーンウイーンの共産党新聞にも、ソヴェト・ハンガリーが万国のプロレタリアートに呼びかけたどたん場のアピールにも、同じく助けを求める調子が響いていた。「解放されたがなお苦しんでいるハンガリーのプロレタリアートは、諸君に友愛の言葉をよびかける。ただ一種類のインターナショナルリズム、すなわち革命的行動のそれしか存しないのである。」(2)

オーストリア社会民主党は、七月二十一日（日曜）のデモが共産主義者の計画に利用されることを恐れ、七月十八

日のアピールで、予定のデモが日曜に行なわれるか月曜に行なわれるかは地方協議会が決めることだと声明し、オーストリア共産党およびコミンテルンの示したとは別の日にデモの行なわれる可能性を開いた。またオーストリアの労働者たちには、デモが他の要求と結びつけば、真の目的を減少させることになるという警告が与えられた<sup>(3)</sup>。七月二十日の「労働者新聞」に出た一ページのアピールは、「国際的な団結」のために、また「貪欲な帝国主義、搾取する資本主義に反対し、反革命の陰謀に対抗して」デモを行なうことを労働者に要求していたが、同時にそのデモをまったく「静かに威厳をもって」行なうよう、警告していた<sup>(4)</sup>。

コミンテルンのヨーロッパ労働者に対するアピールは遵守されず、コミンテルンの執行委員会は七月二十四日の公式声明で、国際的なストライキが失敗に終わったことを認めた<sup>(5)</sup>が、それに続いてジノヴィエフは、社会主義者たちがこのストライキ運動を抑制したとして、彼らを非難した<sup>(6)</sup>。

そのあと、ハンガリーがソヴェト共和国の樹立をアピールするための最後の好機会がやってきた。それは、七月末のサン・ジェルマンにおける対オーストリア講和条件の公表であって、そのきびしい内容は、オーストリア・プロレタリアートの革命的感情のみならず愛国的感情をも刺激したからである。共産主義の「赤旗」Die Rote Fahne は、講和条件の受諾はオーストリアのプロレタリアートにとって「自殺」行為であり、「唯一の救済者はソヴェト政府である<sup>(7)</sup>」と主張し、たとえその結果協商国による占領がおこっても、「プロレタリア共和国のための闘争」後の占領は、イギリス・フランス・イタリア・アメリカのプロレタリアートにまったく違った印象を与えるであろう<sup>(8)</sup>、と論じていた。西側への挑戦はたとえ取るに足らぬゼスチュアであるにしても、それは明らかに英雄的なものであり、少なくとも長期的な「プロレタリアートの」利益に合致するものであると考えられた。「サン・ジェルマンの殺人的講和」の受け入れはドイツ系オーストリアのプロレタリアートを絶望的にすることが指摘され、またこの講和は、民族自決の欺

購的スローガンのもとに、西部ハンガリー問題をめぐってハンガリーとオーストリアのプロレタリアートを対立させようとしていると非難された。「われわれ共産主義者はただ、プロレタリアートの自決を認めるだけである。……その受諾がオーストリアの奴隷化と植民地化に導くような講和は、ウイルソンの無力な従属国家——ポーランド、チェコスロヴァキアおよびオーストリアから成る——による西側の壁をつくり」、「ロシアおよびハンガリーのソヴェト共和国を押えること」を狙ったものすぎない。そのほか共産主義者の刊行物のなかには、オーストリアとドイツに対する特別の同情、講和条件に対するはげしい攻撃が、随所にみられる。

要するに、ロシアおよびハンガリーの共産主義者は、戦敗国であるオーストリアとドイツを特に有望な目標とみなし、連合諸国による苛酷な条約のおしつけが、絶望に陥ったこれら被征服国民を共産主義の腕のなかへ追いやることを望んでいたのであり、七月末にプロレタリアートを闘争にかり立てようとしたオーストリア共産党の必死の努力の主要な動機は、ハンガリー・ソヴェト共和国を救うことだったのである。しかしこのような扇動や宣伝も、結局成果を収めることはできなかった。

最終段階のハンガリー・ソヴェト政権とオーストリアの関係については、今一つの重要な問題点が残されている。ハンガリーのソヴェト政権は当初から不安定であり、地理的孤立、敵意をもった近隣諸国による包囲、軍事的な弱さが、その生存能力を疑わしいものにしていった。特に、希望され約束されたソ連の軍事援助が直ちに来なかったことが、重大な打撃を与えた。ハンガリー・ソヴェト政権は、五月から六月にかけてチェコ軍に対する反撃を開始し、スロヴァキアに進撃してチェコ軍とルーミア軍を分断するなど、つかの間の軍事的成功を収めたが、これも、ハンガリーの共産主義者たちの念頭から暗雲を取り除きはしなかった。それゆえ、革命の周辺への拡大に期待をかけ、宣伝や扇動に力を入れる一方、連合国との妥協によってソヴェト・ハンガリーをできるだけ長く存続させる道も意識にの

ぼっており、ハンガリーの共産政権は、それが実際に倒れるかなり前から、いやいやながら、新しい政府に権力を譲らなくてはならぬ可能性のことさえ考えていた。このことがはじめて明らかになったのは、ルーマニア軍とチェコ軍の攻撃が開始され、前線で大々的な軍事的敗北がおこったあとの五月一日のことであった。<sup>(11)</sup>この日の夜の閣議で、クンフィは、敵意の停止とそれに関係する新ハンガリー内閣の問題を論ずるために協商国と模索的な交渉にはいつてほしいという趣旨の話を、オーストリア社会民主党の政府にもちかけるべきであると提案した。しかし頑強な共産主義者サムエイ Tibor Samuely は、オーストリアの調停という考えを拒否し、それは「党の統一を破壊するであろう」と警告した。

このようなハンガリー側の意向がオットー・パウアーに伝えられたのは、六月二日のことであった。この日、カニングム大佐はオーストリア外相を訪ねて、次のように伝えた。それによれば、ブダペストの労働組合代表が同市駐在のイギリス代表フリーマン Freeman 大尉に近づき、「協商国は労働組合の指導者たちによって組織される政府を認めるかどうか、その場合には、西側諸国は封鎖を解きハンガリーと講和を結ぶかどうか」を尋ねた、というのである。<sup>(12)</sup>これは、ハンガリーの軍事的状況がよくなった時期であつただけに、驚くべきことであつた。

これがパウアーにどう受けとられたかは明らかでないが、カニングム大佐はパウアーにこうした最近の情報を伝えながら、ハンガリーのポリシェヴィスト政権が労働組合の指導者と社会民主党に率いられる政権に変わることは、オーストリアに利益を与えオーストリア社会民主党の政治的利害とも一致するから、パウアーは改造を歓迎するであろうと考えていたようにみえる。なぜなら、ハンガリーのこのような政府は、隣国オーストリアにおける共産党の冒險主義を除去し、ポリシェヴィキの恠がオーストリアに拡がることを妨げるばかりか、ハンガリー国民が反対の極——反動的な反革命——にはしることをも防ぐであろうと思われたからである。

その後ある期間にわたって、ハンガリーのソヴェト政権を、労働組合員や社会民主主義者から成り共産主義者を除外した政府、西方諸国に受け入れられ講和を締結できるような政府と取りかえるための交渉が進められることになるが、そのイニシアティブをとったのが、クンであったか、ハンガリーの労働組合および社会民主党の指導者たちであったか、それともウィーンの協商国使節団であったかを確認することは、困難である。ただ、のちにベームが交渉の意を受けてウィーンに赴く数週間前に、早くもブダペストのイタリア使節団がクンに、ヴェルトナー J. Weltnér、バィヤー J. Peyer らの社会民主党指導者をウィーンに送ることを求めた事実があることは、知られている。おそらく双方の側が、それぞれ他の側と交渉することを熱心に望んだのではなからうか。ハンガリー政府は、ソヴェト政権のうち可能なかぎりのものを救い出して存続させたいという意向から、また協商国の代表たちは、絶望的な共産主義指導者たちがハンガリー政府を平和裡にかつ急速に改造するのを手伝うために、いいかえれば、改造を実現させる代わり共産主義指導者たちに個人的安全を提供し、こうして、協商国軍隊を直接巻きこむような強力な干渉をせずに戻せたいという気持から、交渉にのり出したのではなからうかと考えられる。

ウィーンで行われた交渉には、西側諸国の代表、特にイギリスのウィーン使節団長カニンガム大佐、ハンガリーの指導的な社会民主黨員で、先のハンガリー赤軍司令官であり七月中旬以後ウィーン駐在のハンガリー公使となったヴイルヘルム・ベーム、ハンガリーの労働組合および社会民主党の指導者たち、オーストリア外相オットー・パウアーが関係し、交渉の大部分は、ハンガリー内閣およびクンに十分知らせたうえで行なわれた。しかし、その過程にみられる重要な問題点については、さらに立ち入った考察を必要とする。

ベームが七月十日に陸相辞任を申し出たとき、内閣は、財政人民委員ヴァルガ Jenő Varga の示唆で、ベームにウィーン駐在公使の地位に就くことをもとめた。前任者のツォーベル Ernő Czöbel は、オーストリアの国内問題に干

渉し外交上の義務にはなだしく違反したとの非難を受けて、オーストリア政府の強要で召還されていた。当時ヴァルガは「オーストリアの支持を必要と」考えており、「オーストリア社会民主党指導者の幾人かと親しい」ベームは、ハンガリーの言い分を通すうえで大いに役立つと思われる点に注目したのである。ベームはクンファイ、ガルバイ、ヴェルトナーらの社会民主党指導者と相談したあと、受諾を決意したが、その際政府に三つの条件を出した。(1)オーストリア社会民主党が彼の任命を歓迎するかどうかを、バウアーから確認したい。(2)オーストリア内でのハンガリーの宣伝をやめ、今後はそのための物質的援助をいっさい停止してほしい。(3)ウィーン駐在の協商国代表を通じて協商国側の意向を確かめ、必要があれば彼らと交渉する権利を自分に与えてほしい、というのがそれであった。ベームによれば「クンはこれらの条件を喜んで受け入れた。」<sup>(16)</sup>ベームは当時すでにソヴェト政府を倒す覚悟もっていたと推察され、クンもこれに気づいていたと思われるが、<sup>(17)</sup>しかしこの時点では、彼がなお、ベームとオーストリア社会民主党指導者および連合国代表とのウィーンでの交渉を価値あるものと考えていたことは、否定できない。七月十四日に、ベームがこうした事態の進展をバウアーに伝えたとき、バウアーは満足したようにみえたが、この場合にも、オーストリアの国内問題に対する不干渉の誓約を強く要求した。そして彼は、直後の七月十六日に、サン・ジェルマンのオーストリア代表団長カール・レンナー首相にあてて、「ハンガリーにおける変化は切迫している。ウィーン經由で協商国との協定に達しよう」とする一つの試みがなされている。「この場合、多分わたしが調停を行なわねばならないであろうが、しかしこのことがおこるかどうかは、わたしにはいえない」と書いて<sup>(18)</sup>いる。

こうした事態は急速におこった。二日後、ウィーンのアメ리카代表ハルステッド Halstead (A・C・クリーリッジ教授の後任)がパリの合衆国講和交渉委員会に送った電報のなかで、オットー・バウアーが「ペーラ・クンおよびポルシェヴィキの極端論者を追い出すことの可能性」についてベームと論ずるつもりであるとカニングラム大佐に語った

ことが述べられ、「パウアーは、自分が交渉を行なうべきかどうか、もしくは、カニンガムとわたし（ハルステッド）がそうすることを望んでいるかどうかを、知りたがっていた。パウアーには、ベームと話しあうべきだと伝えておいた<sup>(19)</sup>」と記されている。

こうしてパウアーは、ソヴェト政府から権力を引き継ぐはずの新ハンガリー内閣の形成にかんする交渉で、調停者の役割を演ずることになった。彼がどのような考えでこの役割を引き受け、この交渉をどのような方向に導こうとしたかは、なお確認することができない。ただ知られることは、イギリスとアメリカの代表を含めて、ハンガリーの「極端な急進主義の除去<sup>(20)</sup>」に関心をもつすべての関係者がパウアーに信頼をよせていたようにみえることであり、彼の調停者としての役割は、彼自身の強い自発的意志にもとづくものではなく、やむなく引き受けざるをえなかった立場であり、当時のオーストリアの複雑な地位を反映したものといえよう。しかも彼はすぐにこの役割を離れ、七月二十六日にはオーストリア外相を辞任している。

ベームとパウアーによって始められた交渉は、結局ベームとカニンガム大佐の間で継続された。七月二十三日のベームとカニンガムの最初の会合で、カニンガムは、ハンガリーの危険な軍事的状況を考慮して「協商国と平和的に協定を結ぶ必要」を強調し、自分は協商国の他の代表たちと意見をまとめたうえで、今後数日中に、ハンガリーとの講和条約について、パリに半ば公式の勧告を行ないたいと語った。しかしその際、ソヴェト政府とポリシエヴィズムは除去されるべきこと、あらゆる階級の代表者による新政府がつくられるまで、独裁的な政府が一時引き継ぐべきことを要求し、そのとき鎖は解かれ、ハンガリーは食糧と石炭を供給されるであろう、と述べている<sup>(22)</sup>。

その間にハンガリーの軍事的状況は急速に悪化した。七月二十六日の協商国の声明は、ルーマニア軍に対する赤軍の反攻が最近再開されたことなどの理由で、ハンガリーのソヴェト政権とクンを公然と非難していたが、クンはな

お、ブダペストのポリシエヴィキ政府は協商国との交渉を通じて救われるかもしれない、という幻想を抱き続けている。しかし、ポリシエヴィズムは排除されねばならぬという協商国の決意を知るに至ったとき、彼は一連の自暴自棄的な混乱した動きをみせた。すなわち彼は、多分いっそう有利な条件を得ようとする目的で、他の二人の社会民主党指導者ヴェルトナーとバイヤーをウィーンに送り、さらに七月三十日と三十一日には、国境の町キライヒダ Királyhidák の駅で、これら二人およびベームと会見している。サン・ジェルマン講和条約が西部ハンガリーに対するオーストリアの要求を認めていることを知った時にも、クンはベームに電報をうって、オーストリア共産党に四〇〇、〇〇〇クローネを渡すようベッテルハイムに勧めてほしいと頼み、オーストリアのプロレタリアートは、ただソヴェト共和国を宣言するというだけの条件で、協商国が約束しているすべてのものを得ることができると、オーストリア共産党の指導者トマン Tomann に伝えてくれるように依頼した。これについてベームは、「ハンガリー革命の倒れる三日前に……クンは彼自身とその国を欺き、四〇〇、〇〇〇クローネを提供し子供じみた約束をすることによって、……飢えているオーストリアのプロレタリアートを、新しい革命にとびこんでソヴェト政府を宣言するよう誘うことができる」と信じていた」と書いている。ベームはクンに、「オーストリアの国内問題に干渉しないというわれわれの契約と矛盾する」これらの訓令を実行することはできないと通告し、翌日その訓令は撤回された。

七月三十一日のキライヒダ会議で、クンは、軍隊が「今ほど熱狂的なことはかつてなかった」と主張し、「ソヴェト共和国の状況は非常に順調なので、協定は不必要だから、協定は結ばないように……指令した。」<sup>(23)</sup>明らかにクンは、協定を提示した条件がポリシエヴィズムになんの譲歩もしていないことをすでに確認しており、それゆえ最後まで耐えぬこうと決心していたのである。

クンが軍事的状況について描いていたイメージは、完全に誤っていた。七日二十九日にルーマニア軍はティサ川を

渡っており、赤軍は破局的な敗北を蒙ったのち、崩壊した。どたん場でクンは、レーニンに軍事的援助をもとめるアピールを行なったが、レーニンは、ロシアはソヴェト・ハンガリーに関心と同情をもつことを保証すると答えたにとどまり、しかもこの電報がブダペストに到着したときには、クンはすでに逃亡していた。

七月三十一日、労働組合の指導者たちによって構成されるはずの新政府に権力を護渡しようという動議がヴェルトナーから出されたが、この動議は翌八月一日、党の役員会と内閣の合同会議で、クン自身の示唆によって満場一致で採択された。労働者協議会によって選ばれた新政府の首相は、印刷工組合の指導者で先にカーロイ内閣の社会福祉大臣をつとめたユリウス・パイドル Julius Paldy であったが、新政府はその声明のなかで、ソヴェト政府は協商国の最後通牒に応じたこと、労働組合員たちの新臨時政府がつくられたのも協商国の希望であったことを言明した。その間にクンはか幾人かの共産主義指導者たちは、オーストリアに避難所を求めたが、オーストリア政府はウィーン協商国使節団に問い合わせたのち、行動の自由をきびしく制限する条件で、彼らに避難所を認めた。ハンガリーでは右翼のものさえ共産主義者の逃亡を支持したが、それは、ハンガリーになお多くの共産主義信奉者があったから、政治的移行が平和裡に行なわれるためには、共産主義指導者の逃亡が望ましかったからである。一三三日間にわたるハンガリー・ソヴェト共和国は、このようにしてその生命を終えたのである。

(1) Soziale Revolution, Juli 9.

(2) Ibid., Juli 19.

(3) Arbeiter-Zeitung, Juli 18.

(4) Ibid., Juli 20.

(5) Kommunistisches International, No. 3, 1919, p. 553f.; Low, op. cit., p. 194.

(6) "Zwei Daten," Komm. International, No. 2, 1919, pp. 437—446; Low, op. cit.

- (7) Rote Fahne, Juli 26.
- (8) *Ibid.*, Juli 31.
- (9) *Ibid.*
- (10) 講和条約が発表されたとき、ソ連の新聞は、「ドイツやオーストリアのような敗戦国民に対する特別の憂慮を表明した」(Pravda, May 13)。講和は「ドイツおよびオーストリアのプロレタリアートにとって、奴隷化のシンボルである」だろう (Zvestia, May 16)。一九一九年三月、コミンテルンの設立大会で採択された「国際情勢と協商国の政策にかんするテーゼ」も、特に「敗戦諸国民」に同情をよせていたが、それは、彼らが協商国の新聞で、不断の憎悪キャンペーンの的になっていたためであった。協商国の政策は「ドイツおよびオーストリアの人々に死刑の宣告を下した。」(Kommun, International, No. 1, May 1919, p. 113; Low, *op. cit.*, p. 196)。
- (11) Böhm, Im Kreuzfeuer zweier Revolutionen, München 1964, S. 352.
- (12) *Ibid.*, S. 356.
- (13) HHSa, Fasz. 262, Prädiakate……, Folder IX, ixb, Note von Juni 3.
- (14) クンは当時の提案を無視していた。Böhm, *op. cit.*, S. 500.
- (15) オットー・パウアーは一時ブダペストに帰っていたベームあての七月十六日付の手紙で、アリゼ Alizé (ウィーン駐在のフランス大使)とカニングガムの来訪について知らせている。「両者は、わたしの方からなら促しもしないのに、彼ら自身のイニシアティブで、わたしに次のように語った。協商国はハンガリーに対して力を使う必要がなければ、大変幸いであるだろう。彼らは純粹に社会主義的な政府と交渉することを大いに望んでいる」と。(HHSa, Fasz. 262, Prädiakate……ixb.) 他方、Vol. VII of For. Rel. U. S., Paris Peace Conference には、「もし必要なら、その隣国ルーマニア・チェコスロヴァキアおよびユーゴスラヴィアを通じて、あるいはフランスないし他の連合国の軍隊と協力してハンガリー・ソヴェト共和国を破砕しようとする、連合国側の軍事計画についての、豊富な証拠が含まれている。実際には、フランス政府はイギリス、イタリアおよびアメリカの支持なしに軍事行動に従う危険をさけたいと考えたために、クン政府に対して自己の兵力使用を控えたけれども、クレマンソーは一九一九年七月二十六日に、五大国代表団長会議で、当時のルーマニア軍に対するハンガリー軍の攻勢の結果を見守り、またソヴェト政府を社会民主党および労働組合の指導者たちに支配される政府と取りかえることの可能性を待つという自分の決意は「自

分が決して行動しない」(VII, 322)ことを意味するものではないという点に、注意を促した。しかしソヴェト・ハンガリーに対して西側がとった実際の処置については、フランスの軍隊もイタリヤもしくはアメリカの軍隊も、パリで反対の決定がなされたために、一度もハンガリーの赤軍との戦いに巻き込まれることはなかったのである。

(16) Böhln, op. cit., S. 497.

(17) ベームはすでに七月五日にブダペストで開かれたハンガリー社会民主党指導者たちの秘密会議で、自分はソヴェト政府を倒すために登場したのであり、これに対する軍事行動を引き受ける覚悟であると言明している (op. cit., S. 499)。ウィーンに派遣されてからのベームは、ハンガリー公使としてソヴェト政府を代表しており、クンの訓令に縛られはしたが、他方彼の任務は、明らかに、協商国との交渉によって、当時のハンガリー政府の改造とソヴェト政権の除去を基礎にした解決をもたらすことであった。ハウアーはベームをハンガリー社会民主党の代表とみなしていたし (For. Rel. U. S., XII, 549)、協商国代表たちとベームとの交渉にあたって、前者はベームに、クン政府の排除に際して彼が積極的な役割をもつべきことを示唆し (For. Rel. U. S., VII, 310)、ベームは多少いやいやながらも (VII, 320) それに同意した。ベームはクン政権の放逐には一カ月の時間が必要であると述べたようであるが、実際には軍事的敗北の結果、ソヴェト政府はすぐと早く倒れることになったのである。

(18) HHSa, Ex 462, Präsidialakte, Folder: Telegram aus St. Germain.

(19) For. Rel. U. S., XII, 544.

(20) Ibid., 549.

(21) Ibid., 615—616.

(22) Böhln, op. cit., S. 500f.

(23) Ibid., S. 505.

(24) Ibid., S. 506.

(25) Ibid., S. 508.

(26) Arbeiter-Zeitung, August 4.

つ　た　ら

最後に、これまでの考察をまとめつつ、ハンガリーの共産政権に対するオーストリア社会民主党の態度をどう評価

すべきかについて若干私見を述べ、結論にかえたいと思う。

まず最初に、クン政権崩壊直後に行なわれたオーストリア社会民主党の議論をみよう。そこで特に注目されるのは、八月四日ウィーンの地区労働者協議会で表明されたフリードリヒ・アードラーの見解である。彼はハンガリー・ソヴェト政権の崩壊を、ハンガリーの労働者のみならず「万国のプロレタリアート」にとつての敗北であると考えた。アードラーによれば、「反動はポリッシュ・ヴィズムだけでなくプロレタリアートおよび社会主義一般を攻撃するため、この機会をエゴイスティックに利用する。……被征服諸国において資本主義と戦う意志が明らかに最も強いという事実は、相変わらずわれわれの状況にとつて決定的なものである。しかし、社会主義を導入しうる可能性は、不幸にもあらゆる点で非常に弱いものである。」これは「悲しむべき真実」である。いずれにしても、諸事件は「われわれの追求してきた戦術が正しかったことを」示した。「もつとも、それらの戦術は、多くの労働者にとつては理解するところが困難であったかもしれないけれども。もしオーストリアがハンガリーの例に従っていたなら、それはもつとずつと早く倒れていたであろう。」<sup>(1)</sup>こうしてオーストリア社会民主党は、正しい政策を選んで嵐を切りぬけたことを、喜んでいるかにみえるのである。

しかし国際共産主義は、第二インターナショナル特にオーストリア社会主義に対して、痛烈な非難を浴びせた。コミンテルンの執行委員会は一九一九年八月五日の声明のなかで、ハンガリーのソヴェト政権崩壊に主要な責任があるのは社会主義インターナショナルであるとの見解を示し、ソヴェト・ハンガリーは「帝国主義的略奪者たちの圧迫を受け、また社会的反逆者たちの大いなる裏切りにあつて倒れたのである」と述べている。<sup>(2)</sup>カール・ラデック Karl Radek とクンも、約一年後に同じ調子の発言を行なっている。すなわちラデックは、フリードリヒ・アードラーとオットー・パウアーに「事実上ハンガリーのプロレタリアートを裏切った」という非難を加え、またクンは、チェコス

ロヴァキア内閣の社会主義者とウィーンの社会民主主義者を、その「国際主義」とはハンガリーのプロレタリア独裁に反対して協商国と同盟することではしかなかつたとして、同罪であるときめつけている。<sup>(下)</sup>

これらの発言はたしかに鋭い批判を含んでいるけれども、政治性、イデオロギー性の強いものであることは、否定できない。われわれは、オーストリア社会民主党の態度を事実即して客観的に評価しなければならぬ。実際には社会民主党の支配するオーストリア政府は、ハンガリーのソヴェト政権に対抗して協商国と同盟したのではなく、中欧における共産主義の狭小な基地をオーストリアに拡張しようとするソヴェト・ハンガリーの企てを防いだにすぎなかつた。オーストリア社会民主党特にオットー・バウアーのソヴェト・ハンガリーに対する態度は、その思想の微妙なニュアンス、特殊な中間的性格をうかがううえの興味深い材料を提供している。彼らは、社会主義の実現という究極目標の点でクンと共通するものを見だし、またハンガリー・ソヴェト政権の存続にある種の政治的効果を期待していたが、その非民主的・独裁的性格には強く反対した。その点でオーストリア社会民主党は、ロシア・ボリシェヴィズムのイデオロギー的対抗物だったのであり、そのため両者の間には真剣な論争が行なわれ、一九一八年から一九二〇年にかけて、オーストリア社会民主党の指導者たちは、ハンガリーおよびロシアの共産主義からたえず毒気にみちた攻撃をうけねばならなかつたのである。

のみならず、一九一八年十一月オーストリアに新しく成立した民主的共和国は、社会民主党に大きな希望を与えるものでもあつた。彼らは、あまり遠くない将来に「デモクラシーの手段」<sup>(3)</sup>によって、すなわち住民の大多数の支持を得ることによって自己の社会主義的目標を達成することができると一時期考え、かつそれを希望したとしても、決して不自然ではなかつたのである。

一九一九年の春から夏にかけての騒々しい雰囲気なかで、社会民主党系労働者のうち急進的かなりのものがソ

ヴェト・ハンガリーに同情をよせたことは事実であるが、しかし実際にオーストリアと共産主義ハンガリーの連合を望んだのは、微弱なオーストリア共産党だけであった。伝統的なドイツ民族的考慮、ドイツ社会民主党との長期にわたる過去のつながりは、オーストリア社会民主党の指導者たちを、「マルクス主義のロシア的変種」の支配するハンガリーよりも、ドイツとの Anschluss 支持に傾かせ、新オーストリア共和国はむしろ東方から強く脅かされていると感じさせたのであった。そこでオーストリア政府は、自国の共産化を退け、ロシアおよびハンガリーからの誘惑に抵抗し、ブダペスト・ウィーン・ミュンヘンの間に連合を形成することによって「プロレタリア革命」を中欧全域に拡大しようとする共産主義者の企図と、衝突せざるをえなかったのである。

同時にまたその背後には、オーストリアの共産化はただちに連合諸国の干渉を招くであろうという大きな不安があった。オットー・パウアーに指導されたオーストリア外交政策の狙いは、経済的・軍事的に弱体である新共和国が新たな戦争に巻き込まれることをさけ、中欧の中心部に東・西間の中立地帯と政治的デモクラシーの要塞を打ち立てようとするにあった。それゆえオーストリア政府は、ソヴェト・ハンガリーを封鎖したりこれに攻撃をしかけたりする点で西側協商諸国や新興継承諸国に協力することはいっさい拒否する決意を示したが、しかしその反面、食糧や原料について協商国に依存していたために、反協商国政策を追求する余裕はなかったし、またそれを望みもしなかった。彼らは、しばしば西側諸国の帝国主義的態度、講和の条件、協商国の Anschluss 反対などをはげしく批判したけれども、他方、東からの共産主義の猛進撃は、これを撃退しなければならなかったのである。

要するにオーストリア社会民主党は、ポリシェヴィズムとはかなり異質であったうえに、第一次大戦直後の重大な歴史的時機に大きな戦略的意義をもつ国を支配していたために、中欧におけるポリシェヴィズム拡大の運命を決するはずの闘争において、事実上ポリシェヴィズムの反対者とならざるをえず、新民主共和国をポリシェヴィズムの脅威

説から防衛する役割を果たしたのであった。しかしまたこの過程にみられるオーストリア社会民主党の中間的で不徹底な態度は、一種の宿命とはいいながら、戦間期の同党のその後の運命をすでに予示するものであったともいえるであろう。

- (1) Arbeiter-Zeitung, August 5.
- (2) G. Zimoviev, "To the Proletariat of the Entire World," *Kommunisticheski International*, August 1919, No. iv, 541—542; Low, op. cit., p. 202.
- (3) K. Radek, "The History of a Coup……," *Kommunist. International*, 1920, No. ix, 1257—88; Low, op. cit.
- (4) Blasius Kolozsvary (Béla Kun), *Von Revolution zu Revolution*, Wien 1934, S. 55.
- (5) O. Bauer, *Bolschewismus oder Sozialdemokratie*, Wien 1921, S. 112 f.

——本稿は、文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。——